

『イエスは悪霊を追い出しておられたが、それは口を利けなくする悪霊であった。悪霊が出て行くと、口の利けない人がものを言い始めたので、群衆は驚嘆した。15 しかし、中には、「あの男は悪霊の頭ベルゼブルの力で悪霊を追い出している」と言う者や、16 イエスを試そうとして、天からのしるしを求める者がいた。17 しかし、イエスは彼らの心を見抜いて言われた。「内輪で争えば、どんな国でも荒れ果て、家は重なり合って倒れてしまう。18 あなたたちは、わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出していると言うけれども、サタンが内輪もめすれば、どうしてその国は成り立って行くだらうか。19 わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出すのなら、あなたたちの仲間は何の力で追い出すのか。だから、彼ら自身があなたたちを裁く者となる。20 しかし、わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。21 強い人が武装して自分の屋敷を守っているときには、その持ち物は安全である。22 しかし、もっと強い者が襲って来てこの人に勝つと、頼みの武具をすべて奪い取り、分捕り品を分配する。23 わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしと一緒に集めない者は散らしている。』24 「汚れた霊は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが、見つからない。それで、『出て来たわが家に戻ろう』と言う。25 そして、戻ってみると、家は掃除をして、整えられていた。26 そこで、出かけて行き、自分よりも悪いほかの七つの霊を連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうすると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。』

【説教】

今日の聖書の言葉は、イエスさまが悪霊を追い出されたところが記されています。このように、聖書には悪霊とか悪魔という言葉が沢山出てきます。悪魔や悪霊と聞きますと、なんだか怖いとか気持ちが悪いと感じられる方もいると思います。私のような牧師でありましても、どうお話しすれば良いのか困ってしまうところがあります。出来れば避けて通りたいような、自分たちの普段の生活とはあまり関わりのないこととして考えてしまいがちだと思います。しかし、その人々が避けたい関わりたくないと感じる悪霊に対して、イエスさまは深く関わっていることを、聖書は沢山のところで証言をしています。そういたしますと、どうしてそうまでしてイエスさまは悪霊や悪魔というものに、関わり合いを持たれたのだろうか興味を少し沸いてくるのではないのでしょうか。

イエスさまは、初めて人々の前に姿を現し神の言葉を伝え始めたときから、この悪霊払いということを行っています。また、弟子たちを福音伝道に送り出すときにも、ご自分と同じように悪霊払いを出来るように、その権能をお授けになっています。この悪霊払いというのは、病の癒しと組合わせられて、言ってみればイエスさまのお働きの二枚看板のような役割をしていたわけですから、私たちが聖書の内容を理解しその信仰について深く考えを及ぼそうとするならば、どうしても避けては通れないことなのだと出来るでしょう。それでもどうしても悪霊というものが嫌だ、関わりたくないという人も中にはいると思われれます。そういった場合は、この悪霊が取り憑くことによって、口がきけなくなってしまう一人の気の毒な人の方に、心を向けて行けば良いのではないかと思います。人と話すことが難しくなり、たとえ家族の者でありましても、心を通わせることが難しくなっているという人が私たちの回りにいるかもしれません。

この口がきけなくなるということは、私にも同じ経験があります。大学を卒業したあと就職したばかりの職場で、私はこの言葉を失うという状態、陥ったことがあります。その職場は、先輩たちがみんなとても怖くて、いつもピリピリ緊張していて本当に恐ろしいところでした。一月に一度、職員会議があったのですが、そこで担当している自分のところを報告することになっていました。緊張のあまり声が小さかったのですが、そこでこう

言われました。「声が小さい！何言っているかわからない！」と、そのように強く言われて本当にもう泣きそうになりました。それ以来、会議の時は黙って固まっているようになったんですが、今から思い返しますとあの時私の口を黙らせていた力の正体は、一体何であったのだろうかと思います。一つは、まだ慣れていない人への思いやりや配慮といったものがないことが挙げられると思います。もう一つは、新人というのはみんな未熟ですよ。それでも同じ目的のために働く人なのだという敬意だったり、対等な存在として関わろうとする姿勢に欠けていたのだと思います。イエスさまは、聖書の中で人間にとって一番大切なのは、愛や慈しみなのだとも何度も訴えています。その弟子のパウロも、どんな偉大なことをたとえ出来たとしても、そこに愛がなければ何の意味もないとまで言っています。その愛が損なわれてしまっている場所で、人間の暗闇の力を得て働き出すのが、ここでいう悪霊の正体なのではないかということです。

そのように考えますと、今の私たちの生活しているところにも、悪霊が活発に活動する場所が沢山あるのではないかと考えられないでしょうか。悪霊や悪魔払いといいますが、遠い昔のイエスさまの時代の特殊な文化の中で行われたことだと思われるかもしれませんが、しかし、実際には、今も世界の各地で行われていることでして、世界の中で最も近代化した欧米諸国におきましても、むしろ毎年受ける人たちが増加をしているとのことでした。それだけ私たちの住むこの世界は、愛や慈しみが損なわれているということの証拠なのだとも考えることも出来るでしょう。カトリック教会には、正式な悪魔払いの司祭がいるとのこと。今はちゃんと医師とも協力して、科学的な見地からも治療の一環として行われているとのこと。病院で様々な薬を飲んだり治療をするのですが、それだけではこれ以上の回復するのはもう無理だとなると、最後に頼るのが教会だということになるのですね。

悪霊払いといいますが、そこで行われるのは実は普通の礼拝であります。讃美歌を歌い、主の祈りを初めとした祈りを捧げ、聖書のみ言葉から説教を聞きます。その礼拝に参加して行くことでその苦しんでいる人だけではなく、その家族だったりその人を支える周りの人々も含めて神の言葉から愛について学んで行くことの中で、悪霊からの解放は起こって行きます。人と人の関係を修復して繋げ直して行き、そしてその中で神さまと深く関係を結んで行くことによって癒しや救いをもたらされます。普段なら敷居が高くて教会の中には入れなかった人々も、1人の人を救いたいという愛が引き出されることによって、その敷居をまたぐことが出来るようになるわけです。ですから見方を変えてみますと、まことの癒しや救いをもたらすために、一人の人の問題を通して回りの人たちを神さまが巻き込んで行く救いの連鎖だとも言えるでしょう。

日本にも狐憑きというものが昔からありますが、丁度この悪霊つきと重なると思います。私が聞いた話に、こういうものがあります。ある家族の中で一番年下の娘さんが、訳のわからないことをしゃべり出したり奇みょうな声を叫ぶようになりました。その声は、娘の声ではなく野獣がうめくような声でありまして、まさに狐の声、悪魔の声にしか聞こえませんでした。このとき四つんばいになって動き回りますので、日本では狐の霊が乗り移ったものとして受け取ったのだと思われます。家族の者たちはこれは大変だと、八方に手を尽くして人に勧められた治療を片端から試みます。医者に行って、薬を出され入院している間はなんとか家の方は落ち着きを取り戻しますが、それで根本的な解決になることはありません。そのうち娘さんが家に帰ってきていたときに、狐、悪魔の声で、いろんな要求をしてきました。自分にひれ伏して拝めと言ったり、その娘さんが昔好んで食べていた食べ物を皿いっぱいにしてよこせと言ったりして、家族の者たちを困らせました。初めは怖くてその要求に取り合おうとしなかったのですが、それでも娘を救いたいという家族の思いが勝り、その声と会話を交わすようになりました。するとその会話の中で、その家族は昔のことを一つ一つ思い出して行きました。まだ、その娘が小さかった頃、みんなが元気で仲良くしてた頃は、その娘さんの好物をみんなで食べていたことを思

い出しました。それがいつの間にか家族の中にわだかまりが沢山出来てきて、言葉に出来ないしこりのようなものが沢山詰まって来てしまっていたのです。そのしわ寄せが、一番弱いその娘さんに表れてしまったのではないかと皆気がつきました。本当に申し訳ないことをしたとみんな涙を流していると、つきものがとれたように娘さんの表情が穏やかになって行きました。その後、少しずつ回復していったとのことでした。

この家族に訪れた大きな危機は、確かに大きな苦しみをもたらしました。ただ、その大変な問題に取り組んで行くことを通して、今までの自分たちのあり方を振り返り、今後の家族の進み方を立て直して行くことが出来るようになったのです。この話と同じように、私たちの住んでいる世界に問題を抱えて苦しんでいる人がいたとしたら、それは人々のしわ寄せが犠牲を強いる形で弱いところに襲いかかっているものとして、見る事ができないでしょうか。このような症状で苦しんでいる人というのは、この世界に愛が欠落していることを身をもって私たちに教えて、警告してくれているのだと私には思えてなりません。たとえ大きな問題として表れていなくとも、誰もが苦しくて、みんなつらくてイライラしていて、怒ってばかりいて、「こんな世界にいったい誰がしたんだー」と、叫びたくなることがあると思います。その心の苦しみを、嘆きの声を私たちに代わって、大声で叫んでくれているのですね。

実は、私も時々「わー」と言ってみたいな、思いつき叫んでみたいと思うことがあります。特に礼拝の中で、こう言ってみたいという衝動があります。「神さま、どうしてなんですか？ どうして世の中は、こんなにも理不尽なことが多いんですか。ずるいではないですか。」なんて言ってみたいですね。もし、何かの拍子にたがが外れて、強いストレスだとかいろんな悪い状況が重なれば、そういうことをやりかねないと思います。結構紙一重の状況で、私たちは生きているのではないかと思います。そういった制御の効かない、自分の中の暴れん坊の部分をもし悪霊というのなら、どの人でも一様に多かれ少なかれ持ち合わせているのではないかと思います。そのことを認めることが、返って大きな問題を抱えて苦しんでいる人やその人を支える人々と、自分たちを繋げてくれる触れあう場所を造ることが出来るのではないかと思います。「気味が悪い、怖いな」という見方から、「どうして獣のような声をあげるようになったのだろうか。どうして全く黙ってしまって誰も話さなくなってしまったのだろうか。」と、相手を理解したいという思いにつながって行くと思います。「ああ、そうか、実は自分も苦しんでいた同じ原因で、この人も苦しんでいたんだな、この人から沢山大変なことを学ぶことがあるんだな」と、繋がりをもたらしてくれると思います。

イエスさまは、誰もが避ける悪霊付きの人の苦しみを共に担うために、人々の闇の世界に踏み込んで行かれました。自分自身が悪霊の頭だと誤解され酷いことを言われても、それでも真っ暗な暗闇の中で苦しむ人々を救い出したいと心から願ってくださったのです。そうやってご自分の名誉や安全と引き替えに、造り上げてくださったのが神の愛が支配する場所です。イエス・キリストが、その指先で、慈しみ深いその手で触れたところには、神の愛の国が広がって行きます。私たちは、このイエスさまの指先の役割をしたいと願うと思います。キリストの指先となり、キリストの口となって、愛に満ちている安全な場所をこの地上にもたらしたいと願うのです。信頼できる人々に囲まれたとき、人は自ずと雄弁になって、後から後からおしゃべりが止まりません。そこが神の愛で満たされていれば、口を利けなくしていた悪霊は居場所をなくしてしまうのです。そして、たとえ沢山仲間を引き連れて戻って来たとしても、入って行く隙間を見つけることが出来ないわけです。もし一人一人が自らの思いを恐れなくおしゃべりしているのであれば、それはもう神の愛が悪魔に勝った勝利のしるしであります。神の栄光が最も輝くその場所になっているのです。この神の愛のご支配を、教会にそして私たちが置かれるすべての場所に、もたらし保つことが出来ますようにお祈りいたします。